

T<sub>4</sub> RIA とレゾマット T<sub>4</sub> とは  $r=0.913$  であった。Eu 112 例の平均は  $6.58 \pm 1.81$  であった。

T<sub>3</sub> RIA と T<sub>3</sub> RIA KIT II とは  $r=0.922$  であった。Eu 106 例の平均は  $1.26 \pm 0.31$  であった。

以上、KONSUL 各キットは、非常に有用な検査法であると思われた。

#### 11. Reverse T<sub>3</sub> ラジオイムノアッセイの臨床経験

分校 久志 一柳 健次

久田 欣一

(金沢大・核)

Reverse T<sub>3</sub> (RT<sub>3</sub>) は末梢におけるサイロキシンの 5-deiodination によって生成する代謝産物であり、T<sub>3</sub> とほぼ同量が生成されるがその clearance rate は T<sub>3</sub> より早く、また生物学的活性も有していない。今回 RT<sub>3</sub> ラジオイムノアッセイキット(ダイナボットラジオアイソトープ研究所)の基礎的検討と各種甲状腺疾患における分布、他の甲状腺機能検査との相関について検討した。測定条件は 4°C、24 時間を標準としたが、室温 24 時間、2 時間および 37°C 2 時間のいずれも B<sub>0</sub> 低下がみられた。T<sub>3</sub> との交叉性は T<sub>3</sub> 800 ng/dl までみられなかった。再現性はアッセイ内平均 3.0%、アッセイ間平均 14.2% と良好であり、回収率も平均 96.7% と良好であった。検体の RT<sub>3</sub> free 血清による希釈では倍率の増加と共に低値を示す傾向を認めたが、アッセイ内での再現性より、実測値 100~50 ng/dl の範囲する方法がよいと考えられた。血中 RT<sub>3</sub> 値は正常、未治療機能低下症、機能亢進症、妊娠例でそれぞれ平均  $26.0 \pm 6.3$  (S.D.), (n=25),  $10.1 \pm 4.9$  (S.D.) (n=9),  $176.6 \pm 172.8$  (S.D.) (n=9),  $47.1 \pm 11.3$  (S.D.) (n=6) ng/dl であり、正常値は 2 S.D. にて 13~39 ng/dl とした。甲状腺癌で全摘、ヨード治療後 T<sub>3</sub> replacement の 5 例は全例 RT<sub>3</sub> を検出し得ず、T<sub>4</sub> replacement の 2 例は共に正常範囲内であった。MMI または PTU 投与中の機能亢進症では正常~高値に分布したが、両者の差ははっきりとは認められなかった。他検査との相関では、全例で T<sub>3</sub> と  $r=0.571$ 、T<sub>4</sub> と

0.706、T<sub>7</sub> 値と 0.812 であったが、正常および未治療例ではそれぞれ 0.883, 0.810, 0.881, MMI 治療例では 0.491, 0.653, 0.874, PTU 治療例では 0.110, 0.890, 0.982 であった。

#### 12. 一過性 TSH 過剰症(一過性粘液水腫)について

石突 吉持

(石突甲状腺研究所)

一過性 TSH 過剰症の存在を確めるため、昭和 51 年 1 月から 1 年半に来診した症例中、TSH 高値を示した慢性甲状腺炎、<sup>131</sup>I 治療後、手術後例計 135 例を対象として検索した。

慢性甲状腺炎 103 例の年齢分布を見ると、40 歳代を峰とする山型を示し、20 歳代にも多くの粘液水腫が見られたが、若年 (20, 30 歳代) の大甲状腺腫は老年 (50, 60 歳) の大甲状腺腫に比して有意 ( $p < 0.001$ ) に多く認められ、若年例に一過性 TSH 過剰症のあるが示唆された。

T<sub>4</sub>、T<sub>3</sub> 投与量を 8 週間ごとに減量して TSH 変動を見ると、大多数例において T<sub>4</sub> 50 μg/日、T<sub>3</sub> 25 μg/日 ですでに TSH 増加が認められるが、T<sub>4</sub> 投与を中止しても TSH 増加のない症例が見出された。

Steroid 抑制試験(prednisolone 20 mg/日×4週)を行なうと、小甲状腺腫群では正常域までの TSH 低下が見られず、中止後 TSH 増加が認められたが、若年の大甲状腺腫群では全例正常 TSH に復しており、服薬なしで 3~6 カ月後なお正常 TSH を示す症例が見いだされた。

一過性 TSH 過剰症を示した症例群の TRH テストでは、過剰遅延反応が正常反応に復したが、数カ月の正常 TSH 状態の後再び TSH 過剰、TRH で過剰反応を示す症例も認められた。

以上のようにして一過性 TSH 過剰症 11 例を見いだしたが、全て若年の大甲状腺腫例で、ステロイド効果の大きいこと、TSH 高値および FT<sub>4</sub>I 低値の正常化と共に甲状腺腫縮少などの特徴が把握された。